

にいがた 畜産協会たより

公益社団法人
新潟県畜産協会

新潟市西区山田字堤付2310-15
全農にいがた第2ビル内
TEL.025-234-6781~6783

◆畜産安心ブランド生産農場交流会 (平成24年2月17日) ～関連記事4ページ～



◆畜産女性ネットワーク 交流会 (平成24年2月21日) ～関連記事5ページ～

目 次

- ◆ 平成23年度第2回臨時総会の開催結果 ……(2)
- ◆ 平成24年度事業計画 (概要) ……(2)
- ◆ 畜産経営の収益性と技術上の課題
～平成23年度畜産経営指導実施結果から～ ……(3)
- ◆ 新しい家畜防疫互助制度の概要 ……(4)
- ◆ 畜産安心ブランド生産農場交流会を開催
～新たに9農場に認定証を交付～ ……(4)
- ◆ 畜産女性ネットワーク交流会を開催 ……(5)
- ◆ 肉用牛肥育経営緊急支援事業の支援金の交付が終了 …(5)
- ◆ 河内松雄氏生産の子牛が種雄牛に選抜されました
……………(6)
- ◆ 優秀畜産表彰並びに畜産経営発展研修会 ……(6)
- ◆ 声のコーナー ……(7)
「最近思うこと」
酪農経営：佐渡市 外内 和久
「SUKIYAKI」
肉用牛経営：上越市 渡辺 洋一
- ◆ 畜産安心ブランド生産農場だより ……(8)
三条市：村山 喜隆
- ◆ 畜産物市況 ……(8)
- ◆ 編集後記 ……(8)

平成23年度第2回臨時総会の開催結果

平成23年度第2回臨時総会を平成24年3月27日に新潟市中央区の「新潟県自治会館」において開催しました。

当日の議事経過と決議事項と平成24年度事業計画の概要についてお知らせします。

1 経過

(1) 今井会長が臨時総会の開会を宣言

(2) 出席会員数の報告

事務局から書面での出席者を含め開催日現在の正会員の出席数を報告し、定款第17条に定める総正会員の議決権の過半数を有する会員が出席しており、総会が成立することを報告した。

(3) 今井会長挨拶

協会運営に対する日頃の支援に謝意を述べるとともに、平成24年度においては、原子力発電所事故による風評被害や配合飼料価格の高止まりによる生産コストの増嵩などによる畜産業界の厳しい経営環境を踏まえ、今後も国、県及び関係団体と連携しながら、生産者の経営支援と畜産物の安定供給に全力で取り組むことを表明した。

(4) 祝辞(新潟県農林水産部長)

当協会の各種事業が円滑に行われ、県内の畜産業界の経営安定に寄与していることに謝意を表し、併せて、今後とも的確に事業を推進することにより、更なる貢献を期待している旨の祝辞を述べた。

2 議案の審議と結果

次の第1号から第8号及び附帯決議を、議案ごとに鶴巻専務理事が説明し、慎重審議のうえ採決した結果、全員の賛成により全議案原案どおり決議した。

○ 提出議案

- 第1号議案 平成24年度事業計画及び収支予算、資金調達及び設備投資の見みについて
- 第2号議案 平成24年度会費について
- 第3号議案 平成24年度借入金の最高限度額及び借入先の決定について
- 第4号議案 定款の一部変更について
- 第5号議案 総会運営規則の一部改正について
- 第6号議案 役員の報酬等費用に関する規程の一部改正について
- 第7号議案 役員報酬の決定について
- 第8号議案 肉用子牛業務規程の一部改正について

附帯決議

平成24年度事業計画(概要)

当協会は、平成24年度においても、公益社団法人として公益性の高い事業の取組みを推進し、農林水産省及び(独)農畜産業振興機構の補助事業の事業実施主体の公募に積極的に参加する等によって、当県の畜産振興上有意な事業の実施に努め、行政ルート以外の補助事業の県段階の実施団体としての機能を果たすとともに、独自事業の充実を図り、生産から消費に至る各段階の事業を的確に実施します。

○ 主な事業

1 補填金等の交付事業(公益目的事業1)

肉用子牛生産者補給金制度及び肉用牛肥育経営安定特別対策事業並びに関連助成対策を実施する。

2 畜産経営体に対する経営及び技術の改善指導等事業(公益目的事業2)

畜産経営状況に応じて早期に生産性と所得向上を目的とした畜産経営技術高度化支援指導及び畜産経営体質強化サポート事業等を推進する。

また、各種指導事業を通じて「にいがた和牛」の枝肉品質向上を推進する。

3 家畜防疫互助基金造成等支援事業

(公益目的事業3)

口蹄疫等が発生した場合に農場の経営再開を支援するため、基金を造成して互助補償を行う制度の適正な推進を担う。平成24年度から新事業期間となり、仕組みの一部が変更になるので、事業内容の周知と加入促進を行う。

4 畜産安心ブランド認定事業(公益目的事業4)

県産畜産物の安全・安心を推進するため、HACCPの考え方に基づく衛生管理手法を導入した農場を畜産安心ブランド生産農場として認定する。平成24年度は、乳用牛を主体に新規に20農場の認定を計画する。

5 肥育牛経営緊急支援事業(公益目的事業5)

平成23年度に肥育牛経営体に交付した「緊急支援金」及び「価格低下支援金」の(独)農畜産業振興機構への返還事務を円滑に行う。

畜産経営の収益性と技術上の課題 ～平成23年度畜産経営指導実施結果から～

当協会では、配合飼料価格の高止まりと長引く不況の影響で畜産物消費量が減退し、生産物価格の低迷により収益性が低下している畜産経営体に対し、早期に生産性向上を図り、所得を向上することを目的として、畜産経営技術高度化推進事業を始めとした経営指導業務を実施しています。

平成23年度に指導を実施した37戸のうち、平成22年度から継続して指導を実施し、技術水準、所得、財務内容など経営全体の状況を把握できた15戸の経営分析結果から得られた畜種別の収益性と技術上の課題を紹介します。

○ 収益性

酪農経営では、経産牛1頭当たりの乳量が増加したことや販売乳価が上昇したことにより所得額が向上しました。一方、肉畜経営では子牛販売価格及び枝肉価格の低迷により、所得額は大幅に減少しました。継続診断事例15戸のうち所得額が増加したのは、酪農経営4戸、肉用牛繁殖経営1戸、養豚経営1戸の合計6戸のみでした。

飼養畜1頭当たり年間所得額 (単位: 戸、円)

区分	戸数	平成22年	平成23年	増減
酪農経営	5	165,544	221,805	56,161
和牛繁殖経営	2	137,715	96,966	▲40,749
和牛肥育経営	4	81,432	59,482	▲21,950
養豚経営	4	52,409	23,757	▲28,652

○ 技術上の課題

【酪農経営】

経産牛処分率が38.4%と前年より7.4%増加しているため、繁殖障害牛の早期治療の実施、分娩前後の疾病発生予防が必要です。

(集計戸数:5戸)

区分	平成22年	平成23年	増減
経産牛1頭当たり乳量 (kg)	8,790	9,239	449
生乳1kg当たり販売乳価 (円)	116.10	117.53	1.43
経産牛処分率 (%)	31.0	38.4	7.4
平均分娩間隔 (月)	16.2	15.9	▲0.3
平均体細胞数(万個)	25.7	23.5	▲2.2

【和牛繁殖経営】

分娩間隔12か月以内を維持するとともに、子牛の日齢体重を向上するために適切な飼養管理を行うこと、また生産した子牛をさらに高値で販売するために、高能力繁殖牛への更新が必要です。

(集計戸数:2戸)

区分	平成22年	平成23年	増減
雌子牛販売価格 (円)	342,000	333,179	▲8,821
去勢子牛販売価格 (円)	492,856	446,696	▲46,160
平均分娩間隔 (月)	11.9	12.0	0.1
雌子牛日齢体重 (kg)	0.93	0.93	0
去勢子牛日齢体重 (kg)	1.04	1.04	0

【和牛肥育経営】

去勢牛1日当たり増体重が指標値以下の経営が2戸(40%)見られること、また、事故率が指標値以上の経営が3戸(60%)見られるので、これらを改善するために、肥育ステージに合わせた適切な飼料給与を実践すること、疾病の発生を予防するために衛生管理を徹底することが必要です。

(集計戸数:4戸)

区分	平成22年	平成23年	増減
枝肉1kg当たり販売価格 (円)	2,232	2,211	▲21
枝肉1kg当たり素牛費 (円)	871	845	▲26
去勢牛平均枝肉重量 (kg)	481	487	6
去勢牛1日当たり増体重 (kg)	0.78	0.76	▲0.02
枝肉格付4等級以上率 (%)	80.4	91.0	10.6

【養豚経営】

肉豚事故率を指標値の3%以下、1日当たり増体重を670g以上、枝肉上物率を60%以上にするため、畜舎内換気の改善等衛生対策の徹底や厚脂を防止するための飼料給与内容の改善及び種雄豚の更新を行うことが必要です。

(集計戸数:4戸)

区分	平成22年	平成23年	増減
枝肉1kg当たり販売価格 (円)	448	453	5
年間換算離乳子豚頭数 (頭)	23.0	23.3	0.3
肉豚事故率 (%)	3.5	3.7	0.2
1日当たり増体重 (g)	657	662	5
枝肉上物率 (%)	49.7	53.7	4.0

新しい家畜防疫互助制度の概要 想定発生規模を見直し、万々に備えます！

家畜防疫互助事業については、当会報前号で、今期（平成21～23年度）の基金の枯渇による積戻し実施状況をお知らせしたところです。

このたび、平成24年度からスタートする来期事業の基金設計とそれに伴う生産者積立金単価等が明らかとなりましたので、概要をお知らせします。

1 主な変更点

○家畜伝染病予防法の改正に伴う変更

移動制限中に出荷適期を過ぎたものの殺処分等による損失の補償が可能となったため、とう汰互助金は廃止されます。

また、口蹄疫発生時の患畜以外への殺処分命令（予防殺）が規定されたため、事業の対象に追加されます。

○発生想定の見直し

今期の口蹄疫等の発生を踏まえた想定発生規模の見直しにより基金設計を行い、基金の枯渇を回避します。

2 基金の規模と生産者積立金単価

○牛の基金

生産者積立金額を今期の6.5倍の8.39億円とし、それに伴って納付単価も6.5倍となります。

○豚の基金

生産者積立金額を今期の1.5倍の3.84億円とし、それに伴って納付単価も1.5倍となります。

3 経営支援互助金の交付上限単価

牛、豚ともに、今期と大きな変動はありません。

4 （独）農畜産業振興機構への返還

さきの口蹄疫大発生による機構立替分を返還するため、来期の終了時から基金残額の半額を返還に充て、残りを生産者に無事戻しします。以後同じ方法で数期に分けて返還していきます。

5 新事業の周知と加入契約

本事業の推進をお願いしている農業協同組合等を通じて、改めて事業の仕組みと契約手続をお知らせします。

なお、今期の積立金積戻し分は無事戻しされ、来期の積立金と相殺できますので、万々に備えて積極的な加入をお願いします。

畜産安心ブランド生産農場交流会を開催 ～ 新たに9農場に認定証を交付 ～

去る2月17日、全農にいがた県本部大会議室において、認定農場、認定委員会委員、管理獣医師、関係機関・団体等約50名に出席いただき、平成23年度の畜産安心ブランド生産農場交流会を開催して認定証交付式と講演会を行いました。

本年度の認定は、昨年12月21日に認定委員会（委員長：楠原征治氏）を開催して、申請のあった乳用牛3農場、肉用牛6農場について審査を行った結果、9農場全てが認定基準に適合していると判断されたものです。これで、認定農場数は232戸となり、県内畜産農家の36%が安心農場になったこととなります。当日、認定証を交付された農場を代表してクリーンミルク生産農場の豊郷牧場・桑原茂氏から今後一層、安全・安心な畜産物の提供に努める旨の心強い決意表明がありました。

認定証交付式の後は、楠原征治氏に座長をお願いして講演会に移りました。県農林水産部畜産課の太田洋一主査からは「県内畜産農場へのHACCP方式導入の取り組み」について、衛生管理向上による生産コスト低減等の動機付けにより地域ぐるみの取り組みを推進していくことが、（社）中央畜産会の宮島成郎常務理事からは「農場HACCP認証の意義としくみ」について、認証体制を構築して認証機関となった（社）中央畜産会の審査で農林水産省が定めた認証基準による我が国初の農場HACCP認証農場が間もなく誕生するので、今後、各地での取り組みを期待する旨の講演がありました。

認定農場数と認定率（平成24年3月1日現在）

畜種	乳用牛	肉用牛	豚	採卵鶏	肉用鶏	合計
農場数	56	73	65	18	20	232
(%)	(21)	(44)	(43)	(50)	(95)	(36)



今井会長に代わって鶴巻専務理事が認定証を交付

畜産女性ネットワーク交流会を開催

2月21日全農にいがた県本部ビル（新潟市西区）において、「平成23年度畜産女性ネットワーク交流会」を開催しました。

当日は、畜産経営に携わる女性、JA及び県機関、団体から50名近くの参加をいただきました。

この交流会は、畜産経営の発展に欠くことのできない、畜産経営に携わる女性を対象として、毎年度課題を選定して開催しており、本年度は、今後の動向が注目されているTPP（環太平洋連携協定）問題を取り上げ「TPP参加で守れるか日本の畜産と食の安全」をテーマとして講演と意見交換を行いました。なお、交流会の概要は次のとおりです。

① 講演

講師の新潟大学名誉教授の伊藤忠雄先生は、TPP問題のこれまでの経緯、懸念される日本の交渉力、アメリカの経済戦略、農林水産業への影響、特に牛肉、乳製品等に与える影響、また、鳥インフルエンザや口蹄疫等の発生により世界的に食料の安定確保が一層厳しくなること等についてわかりやすく解説され、「日本農業に与える影響が大きい割に、国としてのメリットが少ない」とする内容の講演であった。

② 意見交換

生産者の方からTPP参加に反対する行動はどのようにすればよいか、TPPに参加したとしたら6次産業化により乗り切れるか心配、飼料米を含め飼料の自給をどのような方策で進めるべきか、また、畜産物の安全・安心の取組みを強化してゆくことが生き残りカギとなるのではないかなど活発な意見が出され、伊藤先生からは適切な回答いただき、閉会時間を大きく越える活発な意見交換の場となった。



活発に行われた意見交換

肉用牛肥育経営緊急支援事業の支援金の交付が終了

当協会では、東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴う放射性セシウム問題により、資金繰りが悪化した肉用牛肥育経営者への緊急支援措置として、独立行政法人農畜産業振興機構の補助を受けて、「肉用牛肥育経営緊急支援事業」を実施してまいりましたが、2月22日の価格低下支援金の交付を最後に、支援金の交付が終了しました。

支援金の交付実績は次表のとおりですが、今後は、東京電力への賠償請求の進捗に応じて、交付した支援金相当額の返還が必要になります。

(1) 肥育農家緊急対策事業（緊急支援金）

区分	人数	頭数	交付金額
肉専用種		1,677頭	83,850,000円
交雑種		2,993頭	149,650,000円
乳用種		1,755頭	87,750,000円
合計	54人	6,425頭	321,250,000円

(2) 肥育牛出荷対策事業（価格低下支援金）

区分	人数	頭数	交付金額
肉専用種		43頭	2,040,000円
交雑種		489頭	70,010,000円
乳用種		287頭	26,400,000円
合計	22人	819頭	98,450,000円

お悔やみ

去る2月29日、旧(社)新潟県家畜畜産物衛生指導協会（県衛指協）及び（社）新潟県畜産協会で役員を務められた熊倉信夫氏が86歳でご逝去されました。

故人は、昭和51年度から平成8年度までは県衛指協の副会長を、平成9年度から11年度までは会長を務められ、畜産協会に統合後の平成12年度から平成15年度までは理事として、長きにわたり両会の運営、業務の執行に当たられました。

当時は、経営規模の拡大、集約化が進む中で、家畜自衛防疫体制の強化に尽力され、本県の畜産振興に多大な貢献をされました。そのご功績に敬意を表しますとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

河内松雄氏生産の子牛が種雄牛に選抜されました

12月2日、家畜改良事業団主催で国産検定済種雄牛生産者への感謝状贈呈式が家畜改良事業団本部（東京都）で行われました。贈呈式には平成23年に選抜されたホルスタイン種、黒毛和種の検定済み種雄牛6頭の生産者が招かれ、当県の河内松雄氏（胎内市）に感謝状が贈呈されました。

河内氏は昭和47年に30頭の乳用種肥育の経営を開始し、その後、黒毛和種肥育経営に転換し、現在は黒毛和種の繁殖牛19頭、肥育牛34頭の一貫経営を営んでいます。

この度、種雄牛となった「越照昌」は父牛が「美津照」、母牛は「ふくのりひめ」と「安福165の9」の産子である「やすまさ6」で、兵庫系の強い血統です。「越照昌」の能力はBMS育種価が高く、現場後代検定では特に気高系の繁殖牛への交配により得られた産子で、肉量・肉質ともに優れた成績を上げています。

「越照昌」は繁殖牛を所有する自分だけではなく、関係者の協力や努力があったからこそ生まれた、新潟県が生んだ種雄牛だと河内氏は語ります。そんな「越照昌」は、新潟県の牛であることが一目でわかるようにと、「越」の字を取り入れて河内氏が名付けました。新潟の名を背負った「越照昌」の今後の活躍が期待されます。

感謝状贈呈式にて 河内氏夫妻



(社) 家畜改良事業団 提供

優秀畜産表彰並びに畜産経営発展研修会

2月27日、新潟県自治会館において、生産者の経営改善や畜産関係者の指導力向上を図ることを目的として、優秀畜産表彰並びに畜産経営発展研修会を当協会、新潟県畜産振興協議会及び新潟県農業協同組合中央会の主催で開催しました。

優秀畜産表彰では、地域振興部門として2事例が受賞されましたので、評価された主な取り組み内容を以下のとおり紹介します。

村上・豊栄地区飼料用米生産利用推進協議会

- ・村上市でわら専用稲を給与している肉用牛農家とそれを栽培する耕種農家、新潟市豊栄地区の養鶏農家が協議会を設立し、養鶏農家がわら専用稲の子実をトウモロコシに代わる安全で安価な飼料として利用
- ・飼料用米の嗜好性、産卵率等を調査し、トウモロコシに勝ることを確認して取り組みを推進

阿賀野市WCS地域検討会

- ・畜産農家は購入粗飼料の約3割をWCSで代替し、経産牛40頭経営で年122万円の飼料費削減
- ・耕種農家は10a当たり約5万円の所得向上
- ・WCSの収量、品質ともに高く安定し、作付面積も当初の0haから平成23年は18haに拡大



新潟県畜産協会会長賞の授与

畜産経営発展研修会では、まず、(有)ベネット代表取締役社長の青木隆夫氏が「消費者ニーズと生き残りをかけた経営戦略」について講演し、次に、県内で経営の多角化を実施している畜産農家等をパネラーとして、多角化の問題点や今後の展望等についてパネルディスカッションを行いました。

参加者から多くの質疑、意見が寄せられ、経営多角化の実現性について活発に討論されたことから、最近の厳しい畜産情勢に対応するためのヒントを得ることができた研修会であったと判断されました。



酪農経営

佐渡市徳和
外内 和久



肉用牛経営

上越市名立区平谷
渡辺 洋一



『最近思うこと』

一昨年、口蹄疫、昨年、東日本大震災と2年続けて災害が発生し、本年は災害がない無事な年になることを祈ります。

我が家の経営は経産牛6頭、繁殖和牛2頭、水稲+園芸の複合経営であり畜産経営としては小規模なものです。私自身は団体職員として勤務しながら畜産部門の中心となり、両親が水稲、園芸部門の中心となって経営しています。

佐渡は離島であり県内の酪農家よりもどうしても生産コストが高くなります。特に、私の住む赤泊は平野部がなく傾斜のある山間部に小面積の耕地が点在している地域のため、収量の多いデントコーンを50a作付けしていますが、どうしても粗飼料は購入が中心となります。

このことから経営を続けるためには、1頭当たりの乳量の向上が必要と考え、乳牛の導入や改良に向けた努力を続け、3年位前に牛群平均乳量で10,000kgを達成し、その後もここ数年は10,000kg前後で安定しています。

一方、佐渡では牛乳の有利販売を行うため、クリーンミルク生産農場への全戸認定に向けた取組みがなされておりますが、私も平成21年度に認定を受け、乳質については特に注意して管理しています。また、消費拡大にも今後、力を入れていきたいと考えています。

昨年はできませんでした。一昨年、我が家の牛をイベントに連れていき、乳搾体験を実施しました。初めての試みで最初は不安でしたが、消費者から多数集まってくれ、みなさんに楽しんでもらい、牛乳の良さを感じてもらえたと思います。

現在、佐渡にかかわらず全国的に後継者不足や飼料高、肉相場の低迷などにより酪農家戸数が減少しており、生乳の生産量も減少していると聞きます。本年から3か年は増産型計画であり、意欲ある農家にとってはチャンスと考えており、我が家も牛舎が老朽化していることから規模拡大を思案中です。情勢の変化がめまぐるしく、投資してまでやれるかとても不安ですが前向きに検討していきたいと考えています。

『SUKIYAKI』

「上を向いて歩こう」は坂本九さんの大ヒット曲。この曲は日本でもお馴染みですが、実はイギリスやフランス、アメリカ等でも大ヒットしていたそうです。海外での曲名は「SUKIYAKI」。外国人の知る日本の有名なイメージとして題されたそうです。

寿司・天ぷらに並ぶ日本の代表的な食文化すき焼き。これに欠かせない牛肉には霜降り和牛がピッタリです。すき焼きをおいしく食べるために和牛の霜降り重視の改良が進んで来たと言っても過言ではないと思います。

私は父親と二人で70頭の和牛肥育と稲作の複合営農をしていて、父は稲作を私は肥育を主に担当しています。稲作部門でも作業受託を含め中山間地域で10haを担う中核農家です。農繁期には稲作部門で人を雇うものの秋の収穫期は多忙を極め、牛舎と作業所・水田を往復し稲わら集めや糞の乾燥調製をする毎日です。

ここ数年の和牛生産は口蹄疫やユッケの食中毒問題、東日本大震災でのさらなる景気悪化に加え津波による原発災害、そして放射能での稲わら汚染問題とそれによる風評被害で和牛の消費は落ち込んでいます。

県内で牛をと畜しても販売し切れないため、大消費地である東京に出荷する事が周囲の流れでしたが、東京よりも新潟で、とりわけ地元上越で自分達の育てた牛を食べて欲しいという強い思いから、上越地域の畜産農家が協力して地元での消費量が増えるよう努力している所です。

農業は大切だ、後継者不足で大変だと言われても後継者は就農できません。やはり親の経営が儲かっていて、就農しても明るい未来が見えなければ興味はあってもなかなか就農に踏み切れないのが現実だからです。私は多忙な父の経営を手助け出来れば、との思いで農場の仕事を手伝い始めたのが農業を始めたきっかけでした。厳しい畜産経営が今後も続きますが、嘆いていても何も変わりません。同世代の畜産後継者と共に、「SUKIYAKI」の歌のように上を向き、前を見て新潟県の畜産を盛り上げていきます。

畜産安心ブランド生産農場だより

三条市：村佐喜農場 村山 喜隆

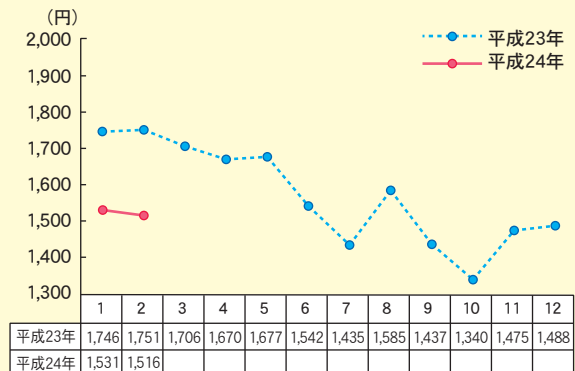
私の農場では、現在、家族4人で働いています。健康な牛を育てるため、家族内で、より多くのコミュニケーションをとることを大切にしています。どんな小さなことでも、報告したり質問したり、とにかく話をするようにしています。時にはケンカになることもあります。しかし、多く話すことで相手や自分を知り、牛を知ることができると思います。家族4人同じ目的を持っているのですから、必ず良い方向へ向かうと信じて、笑顔で毎日作業しています。

最近、特に乳房炎について勉強中です。細菌の種類のこと、牛舎内の環境のことなどを意識しています。クリーンミルク生産農場に認定されてから、一層意識するようになりました。認定を受けても自己満足に陥らずに、何のために認定を受けたのかを考え、消費者の皆さんや子供達に酪農をもっと知ってもらいたいと思います。安心して飲んでもらえる、そんな牛乳を生産できるよう、志を高く持って前に進みたいと思っています。

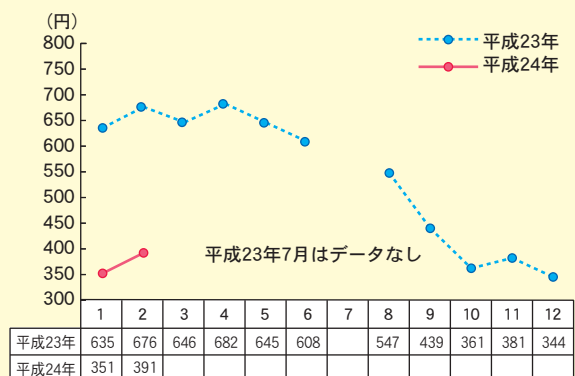


畜産物市況

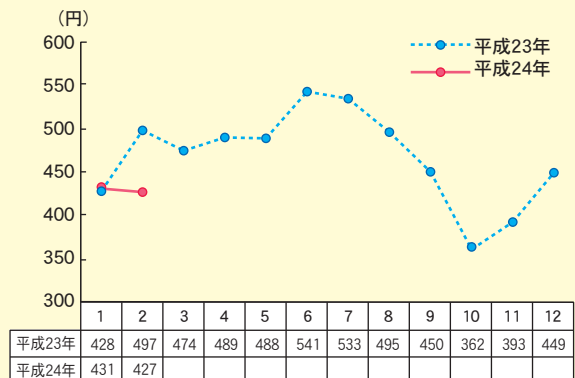
牛枝肉相場・和牛去勢A-4(東京市場)



牛枝肉相場・乳用種去勢B-2(東京市場)



豚枝肉相場・上(東京市場)



編集後記

今年の冬は記録的な豪雪で、生産者の皆さんも畜舎の雪下ろしや周辺の除雪、家畜の管理など大変ご苦労をされたことと思います。新潟市内でも何年ぶりの大雪となり、加えて強風と低温による路面の凍結により、朝晩の通勤時における渋滞やスリップ事故の多発など改めて雪国の厳しさを痛感させられました。

その厳しかった冬もようやく過ぎ去り、雪解けが進むとともに南の方からは桜の便りが届く季節になりました。厳しい冬を過ごした県内においても、春が着実に近づいていることを実感する今日この頃です。

この度、福島第一原子力発電所の事故によるセシウム問題に対応するための、緊急支援事業の支援金交付が終了しました。しかしながら、枝肉価格の低迷は依然として続いており、肥育牛生産者を取り巻く経営環境は厳しい状況にあります。1日も早く風評被害が払拭され、畜産業界にも名実ともに本格的な春が訪れることを切に願っています。

(古田島 記)